

「山羊パワー」で 沖縄をもっと元気に!

沖縄は古くから全国で最も多くの山羊が飼われており、山羊汁や山羊刺しなどの山羊食文化が根付いています。また、観光資源として鬪山羊や観光農園での誘客用としても利用されています。さらに最近ではセラピー、除草や6次産業化への取組など活用の幅が広がっており、多方面で活躍する活力(山羊パワー)で沖縄農業の成長や地域の活性化を後押しすることが期待されています。



新たな山羊料理

沖縄の山羊料理の代表格は何と云っても「山羊汁」と「山羊刺し」でしょう。山羊料理店の定番メニューでいずれも山羊独特の臭みを和らげるためにヨモギ(フーチバー)やシヨウガが添えられています。



▲山羊汁



▲山羊刺し

しかし、この山羊独特の臭みは好みがはっきり分かれ、子供や女性にはあまり人気がないのが実情です。

このため、お店でも新たな山羊料理に取り組んでおり、最近では味や見た目にもこだわった料理が出てきました。例えばハンバーグ



▲ハンバーグ



▲カレーライス

やカレーライスといった子供達にも受入れやすいメニューをはじめ、食べやすいヤギバーガーも登場しています(左の写真以外に山羊肉を使ったピザ、ポロネーゼ、ラーメンもあります)。こうしたお店は観光客が多く利用しており、山羊が観光地沖縄の魅力ある食材として定着しつつあります。



▲ヤギバーガー



▲ギョウザ



▲ソーセージ



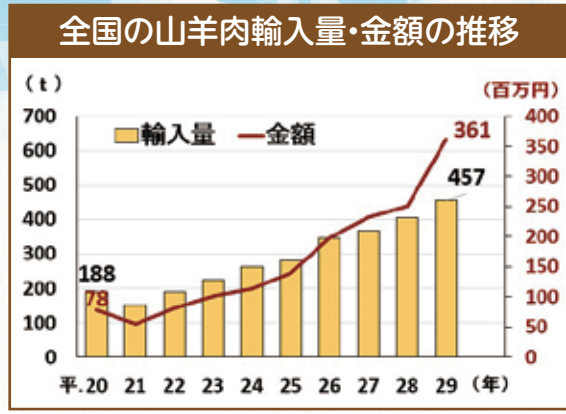
▲シヨウガいため

増える山羊肉需要

全国の山羊肉輸入量は平成22年以降増加しています。これは近年急増しているイスラム教圏のインバウンドや留学生などに対応する

ハラールフードとして山羊肉の需要が増えたことによるものと分析されています※。

※沖縄地区税関「貿易統計トピックス」より



資料:財務省「貿易統計」

沖縄でも海外からの観光客数は毎年増加していることで、県産山羊肉の需要も増えることが期待できます。

県内の山羊の飼養頭数は平成26年以降増加しており、平成29年は1万頭を突破しました。また、山羊の生産者組織も、各地で結成されており、山羊の増頭や飼育技術の向上に取り組んでいます。さらにこれら地域の組織を取りまとめた「JAおきなわ山羊生産振興協議会」は現在、19市町村の20組織が加入しており、会員数も約

400人になりました。

沖縄の山羊の品種は多くが日本ザイン種の雑種で小型であるため、沖縄県では今年度から沖縄振興特別推進交付金を活用し「おきなわ山羊改良基盤整備事業」で山羊の改良を進め、一頭あたりの肉量増加を図ることをしています。

沖縄総合事務局においてもこうした山羊肉需要や生産気運の高まりを受け、山羊振興にかかる取組を開始しており、山羊舎や牧草収穫機などの整備ができる畜産クラスター事業や収入保険制度による経営安定対策などの説明会を開催したところとです。

活躍する山羊たち

山羊は食用としての利用だけでなく、各種イベントや観光農園でも活躍する



▲迫力満点の闘山羊

も活躍するようになつてきました。沖縄では昔から闘山羊が盛んで、「ヒーラーオーラセー」、「ピンダ

アース」などと各地の方言で呼ば

れており、祭の催しの定番となっています。また、観光客の増加に伴い、観光農園も立ち上げられており、そこでの誘客やふれあい体験などの場面でも山羊は人気者となっています。

さらに、幼稚園や小学校での飼育は子供たちの情操教育に役立つとともにセラピーアニマルとして山羊の訪問が老人ホームでも喜ばれています。



▲観光農園では子山羊が大人気

山羊の活用方法を探る

県内の市町村から、こうした山羊の特性を利用し、地域活性化に役立てたいとの相談が沖縄総合事務局に寄せられるようになってきました。

このため、沖縄総合事務局では9月19日、山羊の多面的活用を推進するための検討会を市町村担当者や生産団体に参加いただいて開

催しました。

検討会では、県内外での山羊



▲検討会の様子

を活用したさまざまな取組が発表され、検討を行いました。検討会における発表内容の一部を以下に紹介します。

①農家レストランの取組

南城市の農業生産法人(株)大地では利用されなくなった園芸用ハウスを山羊舎に改築し、150頭を越える山羊を飼養するなど県内でも有数の大規模な経営を行っている。現在、山羊舎の隣で新鮮な山羊肉料理を提供するために国家戦略特区の認定を受け「農家レストラン」の開業に向け準備を進めています。



▲山羊舎と内部の様子

② 地域活性化の取組

本部町のもとぶバイオマス事業協同組合は「田空の駅ハースー公園」の指定管理者として、レストランや直売所の運営を行っています。同組合では公園内に山羊を放牧し、山羊とのふれあいの場を提供しているほか、年に一度「もとぶ田空ヤギ祭」を開催し、乳しぼり体験や山羊の鳴き声コンテストなど多彩な催しで県内外から多くの参加者を集めています。



▲乳絞りしぼり体験の様子

③ 除草活動の取組

那覇市の大石公園ヒージャー愛好会は来園者が山羊の餌やり体験ができるように「ふれあいコーナー」を設置しているほか、銘苅

緑地での除草のために「メエーメエーやぎさん草はみ隊」と称して山羊を放牧しています。ほとんどの種類の草を食べ、また斜面が得意な山羊のおかげで緑地を効率的に管理でき、市の除草費用の軽減にもつながっています。



▲山羊による緑地の除草の様子

④ 農業から6次産業化へ

宮古島市のしろう農園合同会社はアロエベラの生産と関連会社での加工品製造を行っています。放牧した山羊がアロエベラを避けて雑草を食べるため除草剤を使う必要がなく、糞が肥料となるため化学肥料も使わなくて済むのでコスト軽減が図られるほか、アロエベラは有機農産物としてJAS認証も受けています。また、山羊が登る「山羊ピラミッド」を設置した



▲アロエベラ畑の山羊ピラミッドと雑草を食べる山羊

ところ観光客から人気となっております。今後も山羊とアロエベラを活かした「6次産業化」を進めるため琉球大学との共同研究にも着手し、山羊ミルクからチーズを生産することも目指しています。

「山羊パワー」を活かそう

このように山羊は農場から公園、学校、福祉施設、イベント会場などさまざまな場所で活躍しています。山羊そのものの価格や生産性は他の畜産動物に比べて低いですが、これまで一次産業では特に重要視されてきませんでした。し

かし、二次、三次産業との組み合わせではるかに大きな価値を生み出すことが可能になります。人手不足が課題になっている地域では、公園や公共施設での除草作業に山羊を活用してはどうでしょうか。耕作放棄地の有効活用方法としても雑草を食べる山羊の放牧が考えられます。

また、離島においては、農畜産物の出荷や飼料、肥料といった生産資材購入の際の輸送コストが大きな負担になっています。アロエベラの栽培例に見られるように、農産物の生産に山羊を活用することによって生産コストを抑え付加価値を高めることは離島の農業にとっても大きなヒントになると思います。

愛らしい子山羊から逞しい闘山羊まで、山羊には限りない魅力とパワーがあります。この「山羊パワー」を活かせば沖縄の農業・地域はもっと元気になることができます。



農林水産部農政課

☎098-866-1627

